

あくまでも自分史として

「岳陽」と共に

第 50 号

発行日

2025.04. 30

編集・発行

井上講四／堂本彰夫

※連絡先

〒901-2225

沖縄県宜野湾市

大謝名 3-13-24

教育協働研究所

～岳陽舎～

(井上講四宅)

Tel:098-963-9282

E-mail:

gakuyou17@outlook.jp

○久々の「じのん（宜野湾）逍遥」？突然、あの時が！

とうとう、今回、記念の50号を迎えた！とは言え、私の生活は、あの時から何も変わっていない！身体的な変化（下半身の不具合や運動機能の低下体たらく）は、自分でも嫌気がさす程ではあるが、心穏やかな日々が、今でも変わらず続いている！2年前倒しの依願退職後、ここ宜野湾市大謝名の、海が見える高台に引っ越してきてからである！9年前のことである（正確に言うと、9年半前から）！

ところで、先日、ひよんなことから、かの懐かしい？「じのん（宜野湾）逍遥」を行った！要は、久しぶりに一人で、地元散策（そぞろ歩き）をしたということであるが、歩いた場所は、県のコンベンションセンターの周辺であった。いつもならすぐに、海側（トロピカルビーチ）に出るのであるが、今回は、何故か、その敷地内に足を踏み入れたのである！そこでであるが、いつもは見過していた建物（劇場棟）の裏（海側）のガラス張りの部屋に、何か見覚えを感じたのである！それが何であったのか？

しばらくそれを探したが、突然、ある光景が蘇ってきた。そうだ！そこは、20年以上前に（平成15年）後で調べてみた、かの「全国生涯学習フェスティバル沖縄大会」が開催された所であった。私は、その時に、実行委員？の一人として、同フェスティバルのメイン？（フォーラム）をMC担当したのである！様々な想いを胸に、会場一杯の参加者、そして、協力を依頼した、名だたる実力者（かのM先生も！）と共に、熱く語ったものである！だが、それもまた、遙か昔？のことである！学部長の時に参列した大学の入学式・卒業式も、同センターだったのであるが、感傷としては、格段に違う！！

○「肩代わり」ではなく、「肩を貸す」？！

さて、またしてもテレビドラマのことで恐縮であるが、「4月の新生活がスタートする時期に、どんな人生を選んだとしても、『これが、私の生きる道！』なのだ」と胸を張り、そして目の前の誰かの人生にもエールを送りたくなる応援ドラマをお届けする。」ということが始まっているのが、火曜ドラマ（TBS系）「対岸の家事」これが、私の生きる道！である。「専業主婦と働くママと育休中のエリート官僚パパ。価値観がまるで違う『対岸にいる人たち』様々な夫婦・子育ての形！が見せる化学反応（ネットの番組案内より）。まだ、3回しかみていないが（執筆時点、数少ない「推し」のドラマとなることであろう）！

なお、このドラマの原作は、「朱野帰子」という女性脚本家（小説家）の作品（2018年8月刊行／文庫版は2021年6月。いずれも講談社）である。で、「出会うはずのなかった3人はぶつかり合いながらも、共に家事に立ち向かっていく！」ということ、登場人物の、それぞれの思いや立場がリアルで、現代の若夫婦達の苦労には、身につきまされるものがある！テーマや場面設定については、まったく実感のないものと思っていたが（旧世代の宿命？、なかなかそうでもない！様々な示唆（おかしな物言いはあるが！）があるのである！

ちなみに、今回面白かったのは、協力のし合い？の中での、「肩代わり」ではなく、「肩を貸す」ということの大切さである！なかなか妙味な表現である。何でも、「カネ」で考えるな！お互いに来ることを、それなりにやり合えばよいのである！どこかの大統領に聞かせたい！

○イカに教えられる？それは、イカすものなのである！

ところで、これもまたテレビ番組からであるが、そして、かなりの日数が経ってしまったているが（NHK番組「サイエンスゼロ」初回放送日：2025年4月13日）、「イカはいかに生きるか？驚異の生存戦略に迫る」が、大変興味深かった！「熱帯から深海まで、世界中の海で大繁栄している『イカ』。体の色を自在に変化させ、敵をあざむく。擬態の達人なのだが、実は、最新研究から皮膚の色・パターンを仲間同士のコミュニケーションに使ったり、群れの中で視覚を共有している可能性（超個体視覚？）など、驚きの生存戦略が明らかに。白亜紀の隕石衝突など、数々のピンチを乗り越えてきたイカの生き様を知ると、明日から私たちがいかに生きていくべきか、そのヒントが見えてくる！」とあった！

もちろん、私が注目したのは、そこで紹介されていた、イカのコミュニケーション能力や視覚を共有している可能性（超個体視覚？）である！とりわけ、その「超個体視覚？」には、驚愕さえ覚えた次第である！「イカ類は群れを作るが、イカ類に特異的な巨大脳が群れ形成にどのように関わるのか」という脳の制御機構は詳しくは知られていない。本研究はこの点に着目し、アオリイカを対象に『イカ類の視覚制御に関わる脳領域（視葉）の量的左右差、および利き眼に現れる視覚の左右差、すなわち脳と視覚の左右性とその時間変動（ゆらぎ）が、群れの視覚機能に関係する』という仮説を立て、行動学的・解剖学的に検証するというものであったわけである！

本当に、最近、こうした、今まではとても考えられなかった（我々が知らなかっただけでもいいが？）研究成果が、あらゆる分野で出されてきているようにも思える？その意味では、次なる時代区分に移行しているのかもしれない？近代とか、現代とか、一応は、これまでの時代区分が通用してきたわけであるが、それを越えた命名が必要なのかもしれない？まあ、そういうことは、今の私には、直接は関係ないが、今回妙に心に残ったのは、その研究成果が、沖縄科学技術大学院大学（OIST）と琉球大学の研究者によるものだったということであった！沖縄／琉球も、確実に次代を迎えているのである！！（井上）

○今また書かずにはおられない!! 全世界の覚悟の時!!

節目の50号である! こちらも何を書こうかと、一応思案していたが、やはり今また、書かずにはおられないことがある! それは、これまでの社会通念が、ことごとく潰されてきていることである! 例の「バタフライエフェクト」ではないが、国の内外における既存の枠組みや約束事が、ほとんど役に立っておらず、故にリセットさせられなければならない! ところまで、来ているのではないかとということである! つまり、「全世界(人類?)の覚悟の時」が来ているのではないかということである!! ちなみに、こうしたことは、ある意味では歴史必然でもあるが、何人かの為政者(名前は出さないが!)の、半ば個人的な志向(欲望?)に踊らされているものでもある!! ところが、嘆かわしいと言え、まさにそうである?

だが、よくよく考えると、たとえそうであつたとしても、地球温暖化や人口増大(食料問題)という未曾有の課題を背負っていることは、全世界共有のものであり、個々の国論化が進んでいるということは、以前から知っていたが、家はもちろんであるが、そこに住む各人の覚悟が求められることになるのである! その意味で、眼前に繰り広げられている何人かの、あるいは幾つかの国の暴挙? は、その覚悟を現実のものとする、一種のきっかけともなっているというところでもある(大いなる皮肉? 否、腹立たしくもあるが?)。ユーチューブで流されている、これから起きるであろう大変動がそれに相当するのかどうかは分からないが(何故か、符合している?)、確かに、その時が来ているわけである!!

余計なことではあるが、身内の些末な問題で、相変わらずの泥仕合を演じている国もあるが、今は、与党であろうが、野党であろうが、全員が力を合わせて、これからの難局をどう突破していくのか、その英知を結集すべきなのである! でも、なかなかそれが難しい!! 自己(国)中心主義や事なかれ主義、自分(国)を犠牲? にしてまで、動きたくない!! そこに、教育の力が欲しいのであるが...

○強い力と弱い力? その結びつきが「核(中心)」!!

物理学では、4つの力があるとされている! 電磁気力、強い力、弱い力、そして重力である(第5の力もあるらしいが?)。ただし、電磁気力や重力は、ある意味馴染みの力であるが、強い力、弱い力は、一般には、ほとんど知られていない!! かく言う私も、名前くらいしか知らない(そもそも原理が分かっていない!)。これらは核力とも言われ、前者は原子核を作るための力で、陽子、中性子から構成されている原子核がバラバラにならないよう束ねている力の。後者は、原子核の変化を引き起こす力の「一つ」とある(ネット情報)。二つの力自体が、どのように作用し合うかはともかく(分からないので!)、前者と後者を、それぞれ政治と経済に譬えようと、現存の社会(国)も、ある種の原子核とも言えるのではないかと思つた! ちなみに、原子核の変化を引き起こす力が、まだあるというのなら、それが、実は「教育」なのかとも思つた(飛びすぎ!)! 力の統合理物理学と現実社会は、やはり違うのであろうか!!

・短歌に託して様々な「力」を感じつつ!!

・じのん逍遙? 忘れていた記憶?

・そこに そんな場と時間があつたのだ!

・「肩代わり」ではなく、「肩を貸す」!

・何と素敵な! これが本当の友なのだ!

・イカに教えられる 現代の人類?

・「イカす」は まだ絶滅ではない!

・世界の覚悟 たとえおかしな蝶であれ

・待ったなし? だがチャンスもある?

・政治と経済 原子核で言えば

・強い力と弱い力? 果て教育は?

〈特別コーナー〉堂本彰夫の古代史旅枕⑤

○ここからは、九州での隠れた事績を追つてその5

しかるに、先④の事代主神と三瓊瓊杵耳(大山祇)の関係はまだよく整理がつかないが、前にも確認したように、前者は、大国主神(出雲)・大黒様の子神(恵比寿神)で、奈良葛城地方の地主神ともされるが、彼が、後者の娘の玉櫛姫と結ばれているということ(これが、かの日向三代の神話とりわけ「ヒコホホデミ(山幸彦)」と「豊姫」の婚姻話に影されている)、それは、前述の、吉備から近畿・大和に進出した前方後方墳勢力(河内・近江・山崎回り・淀川水系)と前方後方墳勢力(河内・生駒回り・大和川水系)の関係を示しているのではないかと(葛城勢力と瀬戸内海勢力が、協力関係にあつたことを意味する?)!!

だが、そのことは、ここではひとまず置いておくこととして、ここでの追究の矛先は、かの神八井耳命が、多(天・太・意)尊等の先祖とされ、一方でまた、阿蘇の君、肥(火)の君、大分の君、筑紫の君等の、多くの九州の豪族? 達も、その後裔とされているということについてである。すなわち、彼らは、もともと在地の豪族という可能性もあるが、近畿・大和から移動してきた部族・勢力の後裔だと捉えれば(ただし、もともとは彼らの先祖は九州に居て、その後吉備・出雲を経由して近畿・大和に移動していた)、ある時期から九州に移り住んだ(故地に戻った?)部族・勢力ということになる!! もし、そうであれば、何故、いつ、どのように、彼らは九州に移動した(戻った?)のか? そうしたことが、問題(謎)となるわけである!!

そこで考えられるのが、今や定説ともなっている、ある時期の、近畿から九州へ(東から西へ)の文物の移動の事実なのである! そしてまた、それが、3世紀前後、いわゆる「大和(纏向)」に集結した「前方後方墳(前方後円墳・前方後方墳)・吉備から、おそらく出雲を抱き込んで、河内・近江に進出してきた勢力(手槍形土器/火・日神信仰勢力)の一派が、その後九州地方にも流れ込み、例の「吉野ヶ里(環濠集落・銅鐸勢力)」等を放逐したことが考えられる!! そして、それが、いわゆる「倭国大乱」後の「邪馬台国連合」の出現あるいは「倭国」の「白土」政権? と考えられるが、そのことを、実は、神八井耳命の子の「健甕龍命」(九州に向かった後裔達の事績として、「記紀」は示しているのではないかと)ということである!! (つづく) (堂本)

〔編集後記〕節目であつたが、まだまだこれから続く! そして、新たな意欲も! これについては、追々と!! (井上/堂本)